

「自ら学ぶ力」を喚起する手段としての学校体育の在り方

A study about how to awaken self-learning ability in school physical education.

1K06B149

指導教員 主査 吉永武史先生

土岐 彩

副査 宮内孝知先生

【序 章】

本研究の目的は、「自分の頭で物事を考え、自ら学び、主体的に行動をおこす力」をもつ大人が少ない現代社会において、学校体育の授業を使い子どもたちの学習意欲を高める手段を検討することである。文部科学省が「自ら学ぶ力をつけ、生きる力を育てる教育」を国家教育の目標として掲げたことから、「自ら学ぶ力」をもつ人材の育成が着目されていることが分かる。そこで、本研究では学校教育の中の体育の授業に焦点をあてる。他の教科には無い特性を利用して、どのような授業形態をとれば、子どもたちの有能感から生じる学習意欲を高め、自ら学ぶ力を喚起することが出来るか。その手段について考察する。

【第1章】キャリアデザインに求められる社会人基礎力

今社会で必要とされ、未来の日本を創っていく子どもたちが体得すべき能力が「社会人基礎力」である。経済産業省が推奨しているこの「社会人基礎力」は、3つの能力(前に踏み出す力・考え抜く力・チームで働く力)で構成される。学校体育は、社会人基礎力に通じる外向性の特性や課題解決力が身につくという点や、運動能力の向上がキャリアデザインと正の関連をもつといった点から、この能力の体得に有効な場であることを明示した。

【第2章】子どもの運動離れと学習意欲の関係

今、子どもたちの体力や運動欲求の低下が顕著である。「体育が好き」と答える割合は小学生では70%と高かったが、中学・高校と学年が進むにつれ、学習意欲の低下が進行している。その主な原因について心理学的メカニズムを用いて検討した結果、統制不可能性と非随伴性が繰り返り認知されることから子どもたちの劣等コンプレックスが強化され、学習性無力感(運動嫌いの態度形成に通ずるもの)が引き起こされるということが分かった。

【第3章】子どもの学習意欲の向上を目指す学校体育の在り方

子どもたちの内発的な学習意欲を高め、「自ら学ぶ力」を喚起する授業に必要な条件として、教師のとるべきリーダーシップの在り方と、内発的な学習意欲を育てる上で留意すべき点について3つ(学習意欲の育つ順番に気をつけること・過度の賞賛を与えないこと・子どもの手本となる事を意識すること)挙げた。さらに、どのようなプロセスで内発的な学習意欲が具現化されるかについて検討した結果、有能感・自己決定感・他者受容感の3つの源から出現する知的好奇心・達成・挑戦の行動が、内発的な学習意欲の形となって現れ、学習の楽しさや満足感へと通じることが分かった。

【結 章】

「社会人基礎力」の3つの能力は、現代社会の中で心身共に健康に生きていくためには必要

な力である。本論で明示してきた方法を用いた学校体育の授業が展開されれば、子どもたちは、「一生涯を通じて学ぶこと」を忘れない態度と力を身につけることが出来るだろう。こうして自分にしかない個性をアピールすることが出来れば、人とは違う唯一無二の存在となり、社会の中のあらゆる場面で重宝される人材と成り得るだろう。